

介護老人保健施設入所者が抱えている生きる辛さと、入所者を取り巻く家族と介護士の様相
—スピリチュアルケアを参考に「ケア」を考える—

社会福祉学専攻 荒井 麻利子

要 旨

介護老人保健施設入所者が抱えている生きる辛さ、について入所者、家族、介護士、三者の語りから見えてきた事象を基に、介護老人保健施設におけるケアの在り方について考察した。衣食住の保証がされている施設において、入所者は満たされない何か(辛さ)を抱えているのではないかと、との疑問から、スピリチュアルケアを参考に、その辛さの正体とケアの在り方を導いた。

スピリチュアルケアをなぜ参考としたのか、である。自身は介護士として働く中、入所者を「生かされている入所者」、「幸せに見えない入所者」と観ていた。なぜ、自身は入所者についてそう感じるのか、そう見えるのか、と考えた。施設生活がもたらす不自由さだけではなさそうだ、との思いを持った時に出会った言葉がスピリチュアルペインとスピリチュアルケアであった。

概略であるが、スピリチュアルペインとは、生きる根源(自身の存在意義、生きる拠り所)が揺さぶられた時に生じる痛みである。具体的には、愛する人の死、突然の病、または、若者においても生きる意味や自身の存在について思い悩む等、生きる意味を見失う状況が、生きている限り起こり得る。

一方、スピリチュアルケアについては、本論でも触れているが、ニュアンスの違いや、広義で捉えるスピリチュアルケアの説明もあり、概念はひとつに定義づけされていない。しかし、概ね共通した見解は、スピリチュアルペインに対し、他者は無力であるということである。

本研究は、入所者・家族・介護士にインタビューを行い、GTAによる分析を試みたものである。

入所者の思いとして、快・本音・不快という3つの核概念がカテゴライズされた。特に、本論ではその本音の部分構成する、寂寥感・焦慮感・不安感等に着目し、この部分こそ、入所者の満たされない何かの正体(生きる辛さ)であると考えた。さらに、本文中では、この生きる辛さを「『うすうす』と感じる心の痛み」と表現し、スピリチュアルペインとして位置づけた。

生きる辛さを抱える入所者に対してできるケアとはどのようなものであるのか。

スピリチュアルペインに対して、他者は無力である。しかし、何かできることはないだろうか。何もできないところから出発するしかない。生きる辛さを抱えている者が、束の間でもその荷をおろして休むことができるように、また、寄りかかってもらえるようにと思う。できることは、このような小さな灯になることくらいなのかもしれない。そして、その灯を灯し続けることなのかもしれない。しかし、その関わりが大切であり、スピリチュアルケアとはそのような関わりを指すのではないだろうか。

また、ケアにおいては、関係性が重要である。また関係性は、一朝一夕で築かれるものではなく、日々の関わりの継続から芽生えるものである。そこには、ケアする者がケアされる者に対してもつ思い、つまり相手の痛みや辛さを想像し、関心をもつことがなくてはならない。しかし、この「思い」を持つことは、強制されるものではなく、また机上で学ぶものでもない。ケアする者ひとりひとりの感性と自らの人生から涵養された価値観、に拠るものであろう。

このような「思い」のない関わりならば、ケアはAIでも可能である。人でなくては人をケアすることができない理由がここにある。この関係性の糸が結ばれて、はじめてスピリチュアルケアのスタートラインに立てると考える。